



# 梅雨明け



川崎ゆきお

朝方まで降っていた雨が止み、急に青空が出てきた。

「暑いすなあ、今日は」

「梅雨が明けたのかもしれませんが」

「そうなんだ」

「そうです」

「梅雨明け宣言はありましたか」

「ありません」

「あ、そう」

「しかし、これは梅雨が明けた暑さです。暑さの質が違います。これは真夏の暑さで、猛暑へと続く暑さです。梅雨の晴れ間の暑さには上限がありますが、これからは天井知らずになるでしょう」

「じゃ、百度も」

「そこまでは上がりません。地球滅亡ですよ」

「ああ、そうですねえ」

「四十度少し切るあたりでしょうか」

「体温を超えてますなあ」

「熱が出て四十度越えると、これは苦しいですよ」

「じゃ、人も四十度になりますか」

「なりません」

「え、どうして」

「汗で冷やすからです」

「ああ、なるほど」

「水冷です」

「じゃ、水をしっかり飲んでないとね」

「まあ、四十度越えなど一夏に何度もないので」

「はい」

「それよりも地味に暑い日が続きます。35度前後の。これが続くと、結構消耗します」

「ありました、ありました。まあ、毎年ですが、暑い日がね。まあ、夏なので、そんなもの

でしょ」

「そうです。特にいうほどのことではありません」

「夏が来るより、去りゆく夏が哀しいですなあ」

「ほう、文学的な」

「いえいえ」

「だから、夏が来るのは元気でいいのです。エネルギーです。しかしそれが衰え出すときは哀しいです。去って行くのですからね。そして一年も、ここで去るような気がします。盆踊りの頃でしょうかねえ」

「まだ、やってますか、盆踊り」

「参加はしてませんが、小学校の校庭なんかでやってますよ。遠くから見えます」

「梅雨が明けたかどうかの時期に、既に去りゆく夏を懐かしむことを考えるわけですか」

「そうです」

「始めあれば終わりありですからねえ」

「しかし、本当に梅雨が明けたのでしょうかねえ」

「明けてますよ。この青空を見る限り。それに雲も力強い」

「明日からまた雨で、その雨がいつまで経っても降り止まない、なんてことはないですよね」

「明けない梅雨はありません」

「秋の声を聞く頃でもまだ雨で、その後も降り止まないとなるとどうなります」

「それは終末です」

「この世の終わりですか」

「日差しがない。長く太陽を見ていない。そんな状態はこの世の終わりですよ。一気に来るんじゃない、じわじわと」

「怖いです」

「いやいや人の一生もそんなものですよ。天寿を全うしたとしてもね」

「はい」

翌日、また雨が降り出し、梅雨が明けたのはそれから十日後後だった。

梅雨が明けたと言っていた男は、しばらく家から出てこなかった。

了